

序

昭和55年、北海道は7月中旬以降の記録的な低温により、水稲は10a 当たり収量385kg、作況指数81、1等米出荷率が僅か6.5%という大きな冷害を受けた。翌昭和56年も低温や風水害のため10a 当たり収量413kg、作況指数87、1等米出荷率3.3%と2年続きの冷害を受けた。昭和57年は10a 当たり収量501kg、作況指数105の「やや良」であったが、7月下旬の低温による被害を受けたところでは3年続きの冷害となり、地域別に著しい差があった。

さらに昭和58年は、栄養生長の全期間にわたって稀にみる異常低温、少照の影響による典型的な遅延型冷害と、9月下旬からの強霜、10月上旬の降雪とこれによる倒伏の被害が加わり、10a 当たり収量355kg、作況指数74の「著しい不良」となる大冷害であった。

北海道の稲作は、昔から「冷害とのたたかい」であることは今も変わらない。冷害の要因は、低温と少照の気象条件によるところか最も大きいのが、これを助長する要因に品種選択、水田の透排水不良、多肥特に窒素肥料過多、適正を欠く水管理、病虫害防除の不徹底などが指摘されている。しかし冷害の程度は地域により、また同一地域内においても集団や個人の差が極めて大きく、平年並の収量水準でしかも全量1等米を生産している優良事例は決して少なくない。

今後、北海道の稲作を安定的に発展させるため、冷害時における減収軽減、品質向上、低コスト稲作を展開しなければならない。

本資料は農業試験場の稲作研究者並びに稲作担当専門技術員により、昭和55年から58年までの冷災害の要因について技術的な解析を行い、問題点を摘出して、今後の資とするためとりまとめたものである。内容的には十分整理されていない点もあるが、北海道の安定稲作技術確立の参考として活用されることを期待する。

昭和60年3月

北海道立中央農業試験場 場長 馬場徹代

編 集 及 び 執 筆 者

中央農業試験場稲作部 ¹⁾	稲 作 部 長	男 沢 良 吉	編
"	育 種 科 長	森 村 克 美	
"	ほ 場 管 理 科	竹 川 昌 和	
"	育 種 科	前 田 博	
"	栽 培 1 科	前 田 要	
"	"	稲 津 脩	
"	栽 培 2 科	五十嵐 文 雄	
"	"	橋 本 庸 三	
上川農業試験場 ²⁾	水稲栽培科長	森 脇 良三郎	
"	土壌肥料科科長	古 山 芳 広	
"	病虫害観察科長	土 屋 貞 夫	
"	病虫害観察科	八 谷 和 彦	
道南農業試験場 ³⁾	作 物 科 長	佐々木 一 男	
"	専 門 技 術 員	岩 崎 忠 雄	
北見農業試験場 ⁴⁾	普通作物科	天 野 高 久	
北海道農業改良課 ⁵⁾	主任専門技術員	藤 村 稔 彦	

- 1) 069-03 岩見沢市上幌向
- 2) 078-02 旭川市永山6条18丁目302
- 3) 041-12 亀田郡大野町本町680
- 4) 099-14 常呂郡訓子府町字弥生52
- 5) 060 札幌市中央区北3条西6丁目